

〔特集：地域と民族の生活文化〕

人文と自然との調和¹⁾

——麗江古城の歴史と特徴からその価値を知る——

Harmony between Nature and Human: Recognizing the Cultural Significance of
Lijiang Ancient City from Knowing Its History and Characteristics

楊 一 奔

YANG Yiben

麗江市副市長

Vice mayor of Lijiang City, Yunnan Province

E-mail: ljxsb@163.com

Abstract

This paper highlights the history and characteristics of Lijiang Ancient City and its cultural significance as a world cultural heritage in Yunnan Province. The author takes that the significance of Lijiang Ancient City is related to the harmony and fusion among different cultures, and just that the concept of nature-human coexistence is the core of the culture in Lijiang-Naxi areas.

19世紀中葉から20世紀の初頭は、世界の歴史において天地を覆すような変化が起こった時期であった。交通技術が革命的な発展を遂げると同時に、全世界で戦争・殖民主義などを背景として、人類社会における以前のどの時期をも超える人々の互いの交流が現れた。数多くの西側の伝道師、探検家、民俗学者、人類学者、生物学者たちが次から次へと、世界中のすみずみに足を運んでいった。特に20世紀始めの20年間、アジアへの探検は高峰期を迎えた。彼らの足跡を辿ってみると、例えば東はサハリンから西はイラン、北はシベリア南部の各地、南はミャンマーからインドの北側にまで至る。アジア大陸および中国西部の有名な山、川、そして少数民族の住む地域のいたるところまで、外国探検家た

1) 本稿は2003年10月6日に愛知大学国際コミュニケーション学会が主催した講演会の講演記録に基づいて、加筆したものである。主催した河野眞教授と周星教授、通訳の夏目昌子さんに感謝を申し上げる。

ちの足跡を見ることが出来る（写真1）。

麗江を発見

多くのこの種類の外来者はほとんどが欧米中心主義者で、彼らの見る目や考え方はしばしば先入観から来る偏見の影響を受けていた。彼ら西洋中心主義者の立場から、世界の多くの前工業社会に置



（写真1）愛知大学に於ける講演会の様子

かれていた民族が、「野蛮な」、甚だしくは「蒙昧」な民族であると見做された。しかし、一方で多くの人々は異国に対するロマンチックな想像をいだき、実際彼らの探検の過程で、しばしば自分たちの心の中の、この世の外の桃源を探し求めていた。彼らが中国西南の納西族の区域を訪れた時、そこで出遭ったのは煌びやか、且つ、豊富な納西文化、美しい自然の山、川、人文風情であった。これは彼らのその後の人生に計り知れない影響を与えた。と同時に、これらの西洋人が長い間、麗江納西地域を外の世界に伝え紹介に努力したことは、麗江の発見とその後の発展に貢献をもたらした。

最も有名で際立っている植物学者、探検家出身の米国籍オーストリア人 Joseph F. Rock (1884-1962) が初めて麗江を訪れた使命は、植物と鳥類の標本を収集することであった。時間が経つにつれて、彼の研究は植物から麗江納西文化へと移り変わった。麗江にひとたび留まると27年という歳月になり、さらに彼は、一人の傲慢な白人主義者から、次第に文化相対主義者へと変わっていった。ロックは、帰国後、前後して『中国西南の古納西王国』、『麗江納西——英語百科全書』などの著作を完成させ、後代の人々から「西方納西学の父」と呼ばれている。今、彼の著作は依然として学者たちに繰り返し引用され、麗江を知るため、納西文化を理解するための必読書になっている。聞くところによれば、彼は晩年重病にかかってハワイで入院している時、手紙で友人に「自分は冷たい病院のベッドで寝て神の迎えを待っているよりも、玉龍雪山の花草の中で死んだ方がいい」と言っていた、という。

ロシアの P. Goullare (1901-1975) はもう一人の、私たちが尊重する、取り上げるべき人物である。国際援華組織「中国工業合作協会」の一員として、彼は宋慶玲および国際友人である路易・艾黎の提唱の下で、1940年代に麗江に来て、工業合併社を作ることに力を注いだ。低い利息で小中工業者に貸し付けて、彼らが35個の組合（合作社）を作るまで手伝い、麗江伝統の皮革製造業を近代工業へと転化させた。麗江古城に延べ9年も滞在

していた P.Goullare は、大変美しい人生体験を得ることができ、納西社会との交流が最も深い外国人となった。彼は麗江で「この世のエデンの園」を見つけたと考え、彼の著作『忘れかけた王国』という一冊の本の中で、麗江古城の風格と民俗生活について、活き活きと、細かく描いていた。彼はまた「私の想像と不撓不屈の精神によって、麗江で自分の天国を見つけることが出来た」と深く感嘆した。P. Goullare は完全に自分を納西族の一員としていた。彼は次のように言った。「麗江古城で、大自然は無私に自分の恵みを撒き散らし、神霊が世俗で吉祥の福音を伝えていた。人間と自然と神霊が一つになって、互いに交じり合っていた。誰もが、それが自分の身の回りにあると感じることができる。」と。

上に述べたこれら先駆者の体験と著述によって、外の世界は次第に麗江のことを知り、麗江の価値を知ることができた。一方、麗江は西洋人に「発見」される前、実際には必ずしも世と隔絶していたわけではなかった。麗江はかつて「南方シルクロード」と「茶馬古道」の商貿易の集散地と交通の要地であり、西南の中国多民族の長期にわたる共通の歴史発展の中で、しばしば重要な影響を發揮したのであった。そして、現在においても、麗江は依然として政治と経済、文化交流において、重要な地位を持った歴史都市であり名城なのである。

1986年、中国各民族と共に発展した歴史と同じく、多くのでこぼこ道を歩んできた麗江古城は、その豊富な歴史・文化の意味、および、完全に保存された独特な建築によって、中国政府から国家級レベルの歴史文化都市とみなされた。1997年12月4日、イタリアアナポリで開かれたユネスコ（国連教科文機構）は、マグニチュード7の大地震に遭遇したばかりで回復を目指して修築の真最中であつた中国雲南省の麗江古城を「世界文化遺産」目録に入れることを正式に世界に向けて発表した。さらに2003年7月3日、フランスのパリで開かれたユネスコは、麗江を含む雲南の「三江並流（三つの江がひとつに流れる）」地区（怒江、瀾滄江、金沙江が、北から南へ合流する）を「世界自然遺産」に組み入れた。2003年8月30日、ポーランドのグダニスクで開かれたユネスコ会議で、さらに納西族の東巴古籍を「世界伝承文化遺産」の名簿に入れた。

現在、麗江はすでに大地震の災難の中から抜け出している。そして麗江は、自己の光彩と文化価値によって中国各地と世界各国からの観光客を惹きつけている。麗江は「忘れかけた王国」から、ついに全世界から注目される焦点へと変わった。統計によれば2000年には、麗江を訪れる国内外観光客は258万人に達し、2001年では320万人、2002年は340万人になった。では人々はいったい何を見ようとして、はるばる麗江まで足を運んだのでしょうか？ 麗江はいったいどのような魅力があつて人々を引き付けたのでしょうか。

麗江古城の発展経歴、及び、多元文化

人類の歴史はほとんどのところ、異文化との衝突と融合、そして同じ文化が絶えず移り変わってゆく歴史である。麗江地区はまさに千年にもものぼる西南中国の多民族の文化交流の歴史で重要な意味を持つところであり、同時に、このような多民族の文化交流の歴史上に納西族の独自のきらびやかな民族文化は生まれた。

雲南省西北に位置する麗江納西族自治州は1961年に成立し、面積はおおよそ7600平方キロメートル。全県人口は約33万人、そのうち納西族は23万人で、全人口の59%を占める。県城の麗江壩子（高原盆地）は海拔2400メートルあまりで、省都の昆明から560キロメートル。歴史上ではここはかつて滇藏茶馬古道と漢藏文化回廊の重要な中核のひとつであり、辺鄙な町とはいえ、決して不便なところではなかった。

現在でも人口がまだ30万人に達していない納西族は、歴史上において、1400年余り前の唐王朝、宋王朝から、ずっといくつかの強大な政治、文化勢力によって十重二十重に包囲される中に置かれていた。北に強大な吐蕃政権とチベット文化があり、南に人口、面積において納西族の何倍もある南詔の大理政権と白族文化がある。東は漢文化と強大な彝族の勢力に面している。まるで隙間の中で奇跡的に自立していると言ってもいい。その上この隙間のスペースは大きくなく、それはひとつの細長い地帯であり、ひとつの弱小民族がこの隙間の中で生き延び、さらにきらびやかな歴史と文化を創り上げたのである。

納西族の祖先は、中国で唯一の、ひとつの少数民族によって築き上げられ、ユネスコ世界文化遺産の名簿に取り込まれた歴史文化古城——麗江古城を創り上げ、保存しただけではなく、さらに「世界で唯一、まだ生きている象形文字」と呼ばれている東巴文字をも創り上げ、保存した。この種の象形文字で記載している納西族の古代社会の『百科全書』は、即ち東巴経の文化と学術価値をますます重視させた。このほかに、また「生きている中国音楽の化石」とされる納西古楽などの文化遺産は、国内外で名をあげた。現在、中国における56の民族の中で、納西族の文化教育水準は、全国の先進に名を連ねている。

私たちは、歴史の目で麗江古城の発展過程を認識し、また形成された人文特色の原因を探究する時、以下のことに容易に気づく。それは昔から現在までこの民族はずっと堅忍不拔の強い生命力を示しているということであり、一種の開放、見識と向上に進取する歴史的な積極精神と民族特有の心理素質を表しているということである。いくつかの歴史の重要な一環、あるいは転換期において、まずは麗江の木氏土司が積極的に重要な役割を果たしていた。政治上において、賢明な選択は一つの民族発展の鍵になる。正確に民族関係を処理することは、民族の平和、安定につながるものである。歴史上で麗江の木氏土司家族は賢明な政治策略を下した。それは歴代の王朝と一致することを保ち、歴史の潮流に沿って動くと同時に、民族の生存条件を保証したことである。

南宋の末期、麗江の木氏の祖先は、その統治の中心を古城の北面8キロメートルの白沙から獅子山麓へと移し、そこで家やため池を营造した。歴史に「大叶場」と呼ばれるものである。これが麗江古城の原形である。南宋宝裕元年（西暦1253年）に、フビライはモンゴル軍を率いて南の大理に向けて侵攻した。木氏祖先である阿宗阿良は実力を保全するため、大勢の人を率いて金沙江という河の側に行き、フビライの軍隊を迎え、元軍が無事に革の袋で河を渡る（いわゆる「元跨革囊」）のを手伝った。そして、「三賚管民官」という官職を授けられた。のちに、また「茶罕章管民官」の官位を授けられた。阿宗阿良のおかげで麗江古城は破壊されずに済んだ。それだけではなく、さらに、中央と一致する地方管理形式を打ち立てた。

木氏はしっかりと元朝の政権に頼って納西族の各部落を統一し、自己の勢力を発展させた。明の太祖洪武の時代に、麗江の路宣撫副使阿得は軍功を立てた功績によって「木」という姓を与えられた。そして、麗江世襲土府知事を授けられ、勢力はだんだん強くなった。

木氏家族は政治の面が強くなってから、社会経済と文化の発展を非常に重視した。商業貿易、利水、栽培、手工業を重視し、さらに、頻りに明の王朝に銀を出したりした。軍人の俸給を助けたり、租税を取めたり、兵士を率いて戦いに行ったりした。これらによって、明の君主に重視されて、様々な褒美を受けた。明の時代、木氏土司が経営した金、銅、鉄、塩、鉱物などを、雲南、四川、チベットに広げていって、「富冠諸土郡」は当時雲南で最も財産のある土司となった。さらに木氏土司はまた農業、利水技術に目を向けていた。麗江と、その他の管轄する地域で、たくさんの水利施設を建てた。雲南、四川、チベット地域の農業の発展に、また文化的な交流、社会の進歩に貢献をした。

明の末、麗江府第十三代世襲府知事木増の時代に、麗江古城の発展は頂点にまで達していた。その間に、全国各地を遍歴した明の地理学者徐霞客（1587-1641）は、『滇遊日記』の中に当時の麗江の木府を「宮殿は王様の宮廷の様に美しい」、「人々の家は瓦で作られて、ぎっしりと並んでいる」と書いていた。史の記載によると、明の末期、古城の住民は約1000戸あまりに達し、街づくりの技術はすでにかかなりの規模のものになっていた。

木氏一族による470年あまりの麗江統治の間、木氏土司は様々な文化に対して開放的に、違う文化に対して差別せず受け入れる政策を実行し、この地域に多元文化の繁栄を促成させた。明から清の始め、木氏土司は全力を尽くして儒教学を推奨し、漢文化を学ぶことを興し、麗江の漢文化の繁栄を促進させた。麗江は数多くの文人墨客を生み出しただけでなく、木氏土司の一族からもきわめて高い漢文化の教養を身につけた作家たちが現れた。

『明実録』はこのように記載している。「永楽十六年（西暦1419年）二月、麗江の軍民府検校の役人・龐文都は朝廷に『我が府の宝山、巨津、通安、蘭州の地域は帰化してから随分経ちます、どうか学校を建ててください』と申し込んだ。」と。それから、木氏土司

は積極的に漢文化を学ぶようになり、たくさんの漢の文人士を麗江に招聘し、若者に教えるようにした。そして、木公・木増を代表とする漢文化に造詣の深い木氏の文化人たちが生まれ、さらに大量の作品を世に出した。しかも、彼らの多くの作品は『列朝詩撰』、『四庫全書』、『雲南叢書』などの著作に選ばれた。『明史・雲南土司伝』の中に、「雲南の役人の中で、詩を知り礼儀作法をよくするのは、麗江の木氏を始めとする」と書かれていた。

雍正元年（西暦1723年）に朝廷が「改土帰流」の政策を実行した後、麗江の教育はさらに発展した。光緒年間（1875-1909年）までに、すでに義塾（学校）31館、及び多くの郷村私塾があった。「改土帰流」の政策に乗り出してから清の末期の約100年あまりの間に、相次いで7人の進士（仕官、官吏になるための試験に合格したもの）、60数人の挙人が出た。さらに、たくさんの詩作品を世に伝えた知識人も出た。

漢文化の発達によって、自然に麗江古城に濃厚な儒家文化の息吹が生まれた。琴、棋、書、画は古城の人々にとって日常生活で不可欠な存在になっていた。儒家の面影は至る所に存在した。さらに、木氏土司の統治をいっそうに高めるために、木氏土司は自民族の宗教トンパ教の他に、外来の宗教——例えば道教、漢からきた仏教、チベットから伝わって来た仏教など——を開放し受け入れる政策を行った。このことによって、各種宗教は麗江でいずれも早く根をおろすことができた。外来文化に対して常に寛容性を持っていることは、いまだに古城の周辺の各廟、各寺院から感じられる。

古城の北面8キロメートルにある木氏の発祥地・白沙には、木氏土司の時に建てられた大宝積宮と瑠璃殿、この二つの古い建築がある。そして、主に宗教を題材にした壁画が、現在に至るまで完全とっていいほどの状態で、この二つの古い建築の中に保存されている。聞くところによれば、これらの壁画は漢族・チベット族・納西族などの民族画家が共同して作ったもので、約260年間もの時間をかけたそうである。さらに同じ一幅の壁画の中に、しばしば道教と仏教の内容を兼ね備えたものもある。このようなことは他の地域ではあまり見られない。

明の万歴三十七年（1609年）、木増土司はチベットから来た仏教の噶a巴a帽宗派の第6代活仏・昂吾却吉汪秋から、麗江におけるチベット經典の刻印についての意見を受けた。天啓三年（1623年）、『甘珠尔』が刻印され、さらに木増土司は『甘珠尔』に序文を書いた。彼は見本を54匹の馬を使って、麗江から遠く離れたラサの大昭寺まで運ばせた。これは今に至るまで、大昭寺に昔から伝わる宝物である。

康熙六年（1667年）、チベット地域を支配する固始汗（モンゴルの王）の孫・堪着洛桑丹羌（罕都）は兵隊を率いて、中甸（麗江の隣近くの町）を攻撃する時、『甘珠尔』經典を四川の里塘格āという宗派の寺院・強巴林まで運んだ。その故に、その經典は又「里塘版大經典」、或いは、「里塘・麗江版大經典」と呼ばれるようになった。これはチベット地域で『甘珠尔』經典を印刷した最初の版であった。その出版は、チベット文字木版印刷業

が既に成熟期に達していたことを示している。

既に海外にまでもその名を揚げている納西古代音楽は、主に納西族の民間音楽の「白沙細樂」と、中原地域から伝わって来た唐、宋、元の道教科儀音楽とによって作られた音楽である。歴史のさまざまな原因によって、これらの唐、宋、元の道教科儀音楽は、麗江に広く伝わる過程で、しだいに納西族の独自の特徴を溶け込ませた。そして、納西族におけるこれら古典音楽に対する理解と感受をも溶け込ませた。

麗江古城には、今日に至るまで多くのこのような音楽グループがあり、演奏も頻繁に行われている。昔、重要な道教のお祭り、或いは人の誕生日、厄払い、建前、冠婚葬祭などのときに、いずれも演奏活動が行われていた。いま、納西古代音楽はユネスコに「人類の無形文化遺産」を申請したところである。

麗江古城およびその周辺山地には、いまだに納西人の最古のトンパ文化が残っている。トンパ文化は、トンパ教をその核心とし、トンパ文字経典、トンパ宇宙観やトンパ儀式など、内在する納西伝統文化を包括している。今日、トンパ教と麗江古城の納西族住民の日常生活とは、あまり直接に現実的な関連はない。しかし、現在おかれている条件の下で、納西族がいつそうトンパ文化の資源を発掘する積極性は増えることがあっても、減ることはない。例えば「トンパ図案」と「トンパ絵画」から発展してきた「トンパ書画」、トンパ象形文字から発展してきた「トンパ書法」、そして「トンパ宮」で上演されているトンパ音楽とトンパ踊り、及びさまざまな形の「トンパ旅行記念品」が挙げられる。麗江古城には至るところに工芸品店がある。店に売り出されている壁掛け、絵のついたお皿、木版画と、さまざまな小さな手工芸品、その造型の多くは納西の古いトンパ経書から得られたものである。トンパ経典のトンパ象形文字を記したのものには、強い図画性と観賞性がある。それは今日、世界においてただ一つ残されている、また、人々の使用に供する象形文字である。現在、納西族のトンパ象形文字はすでに麗江から出て、世界のさまざまなところの人々に愛好されている。日本神戸大学の中山修一氏は、トンパ文字が日本でもう既に人気の話題になったと認めている。

納西族の人々によって作られた納西文化は、長い歴史の流れの中で次第に発展・変遷してきたが、生態と文化および民族の多様性に富んだ環境の中でも形成と発展を遂げてきた。納西族の文化は、自民族に特有ないくらかの歴史的伝統（例えばトンパ教、象形文字）がある以外に、またこれまでずっと多源的・多元的・多重的及び開放性に富む特徴を持っている。納西文化の形成と発展の過程において、特に漢民族や白族、チベット族など各民族文化との互いの交流で、それら各民族のいくつかの重要な影響を受けてきた（例えば、チベットから伝わって来た仏教、漢民族の文語、道教、洞経音楽など）。したがって、トンパ経典「創世紀」の中の、納西とチベット族、白族は同父異母の三兄弟であるとの説は、まさにこの種の、多源的・多元的・多重的、及び開放性に富んでいる民族特質と心理

素質の有力な証拠である。

正に、木氏族土司のこのような外来文化に対する開放、融和政策は、麗江における約470年間近くに渡る木氏土司による統治を強固なものとし、終には麗江古城を、雲南、四川、チベットの貿易の重要な中心として次第に発展させ、古代、南方シルクロードの影響を受ける地域と、「茶馬古道」の重要な中継地点とした。そして、麗江古城は、この二つの人類の文明の交流通路で、人々のために重要な役割を果たしたのである。

自然との調和的な人類住居環境様式

現代工業社会で生活している人々は、狭いコンクリートの空間の中で、排気ガスを吸い、毎日機械の様な生活と仕事をしているとき、そのような騒々しい都市に対してうんざりした気持ちを持つことがある。そんな時、やはり彼らの住んでいる所からずっと遠く離れて、大自然を求める気持ちが出てくるはずであり、夢に見た故郷を懐かしみ求める想いと衝動に駆られるのである。

ある日本の青年学者は麗江で納西族の祭典儀式を見た後、涙を流しながら酔いつぶれて大変感動した。彼は、本来のアジア文化は森林文化であり、輝かしい自然の中で生活している人々は、一種の恐れと敬虔な心理を持って自然を崇拝している、と考えていた。しかし、今では砂漠の中から現れた西洋文明が、次第に私たちの森林文化に取って代わってきた。もともと日本も納西族の祭典儀式と同じように、天地自然を崇拝し、人間と自然との調和的な古い儀式を探していたが、現在ではこういうことを見るのが難しくなっている。

麗江古城の場所選びは、十分に自然の地形の要素を利用しており、上手く周りの山々や水と一体になっていた。そのように古城全体を山と川の近くに形成させ、その川と山は地勢につれて緩やかに展開した。聞くところによれば、古城を建てる中で終始ある一つの原則を貫いてきた、という。それは「自然と優劣を争ってはいけない」という天、地、人が一つになる原則だそうである。

古城の東北に象山、金虹山があり、西に獅子山が聳えている。東南には広大な平地があり、北側に万年雪の玉龍雪山がある。全体の古城の方位については、古城の正門は東南向きで、北の玉龍山を後ろにしている。冬季になると、獅子山が西北方面から来る寒気を防ぎ、夏になると南風は順調で、古城内の熱気を取り除くことができる。したがって、古城は海拔2400メートルの高原で、さらに北側15キロメートルのところには万年雪の玉龍雪山があるが、冬は寒さが厳しくなく、夏は暑くなく、一年中が春のような季節である。

水は麗江古城の魂である。龍玉雪山の雪解け水と、城北の黒龍潭の泉水は、きらきりと透き通る玉河の水になる。その河の水は北から南へと、そして古城の先端にある玉河橋の下で東河・中河・西河と分流して古城に入る。三つの主流の河はさらに、数十本の小川に

分かれて、町の中に入り込んでいき、塀に入り家を通過する。消えたり現れたり、古城内の人々のすべての家々を通過する。さらに、「三眼井」の白馬龍漕を加えて、古城は「点、線、面」の水系統を形成する。そして、小川の中で自然の勾配を巧妙に形成し、せせらぎの音を響かせ、しぶきが踊り、町中に水流が行きわたり、家々の水の流れを形成し、どの家にも枝垂れ柳といった光景があふれている。最後に、河水は街の南から流れ出て、南に広がる広大な田畑を灌漑する。

古城内に住んでいる納西族は、昔から既に自然崇拜の観念を持っていた。その中で、水に対する崇拜はまさに自然崇拜の一つの重要な内容となっていた。かつての納西人の観念の中で、「署（自然神）」は自然界の生まれ変わり（化身）である。その姿は、頭は蛙に似て、人間のからだ、蛇に似た尻尾を持ち、一般に山、川、谷の中に住んでいる。トンパ經典の記載によると、人間と「署」はもともと同じ父で、異なる母を持つ兄弟である。「署」が山林、河川、野生動物を管理するのに対し、人間は農耕牧畜などを管理する役目であった。しかし、後に、人間が絶えず自然破壊をし続け、自然から金儲けをしすぎたために、「署」が人間に対して復讐することを引き起こしてしまったのである。多くの自然災害が時運に応じて現れた。そこで、災害から逃れるために、人々は「署」を祭らなければならなかった。すなわち、「自然神」の儀式であり、それをもって人々は人間と自然との調和的な関係を求めたのである。

納西先民におけるこの種の自然崇拜の観念に基づいて、昔、麗江古城の住民には水を利用する上で相応の、その土地の民約があった。河の中に汚いものを捨ててはいけぬ。住民が飲料水を汲み取る時間とするために、正午前の時間は河で野菜を洗ったり衣服を洗ったりしてはいけぬ、など。納西先人のこのような「人と自然との調和」の追求といった素朴な生態観は、今日のような文明社会の中でも、奥深い現実的な意味を持っている。

古城の住民にとって大きな水源は、各通りの至るところに広がっている「三眼井」というもので、井戸水が湧き出てから、三つのつながった小さいため池（塘）を形成している。一つ目のため池は飲料水用、二つ目のため池は野菜を洗うため、三つ目のため池は衣服を洗うためのものであり、数百年の間にこの地域の習慣となって、今、誰一人としてこの習慣を守らない人はいない。また、住民が自覚して各自、家の門の前の通りを清掃することは古城住民の義務となっており、まさに長い間このように守ってきたことによって、古城は今日のような清らかで輝かしい風貌になっているのである。

「洗街」は麗江古城のもう一つの独特な風俗であり、それは昔の納西の人達のもう一つの智慧として挙げられる。四方街は古城の中心であると同時に、雲南、四川、チベットの市の貿易中心地でもある。「日が出ると市が始まり、日が落ちると市が終わる」というのは古城の悠久な歴史的伝統である。毎回、市が終わると水門で西の河の水を堰き止めて、西河の水を高い所（上流）から四方街へと流し、街の至る所を洗い流す。そして、それは

中流へと流れ、さらに中流から再び古城に流れ出て、街全体をきれいに保つのに役立つ。

水があるところには必ず橋がある。面積3.8平方キロメートルの古城には、小さな物から大きな物まで、400個ちかくの石造または木造の橋がある。これらのそれぞれ風格を持つ橋は、古城に数多く交わっている河の上に横たわっていて、古城の独特な風景の輪郭を構成している。



(写真2) 麗江古城の大石橋

「大石橋」は古城の中で最も特徴のある石造の橋の一つであり、明朝に建てられたものである。その長さは10.6メートル、高さは2.2メートル、横幅は3.84メートルで、中流の河の上に横たわっている(写真2)。他の橋と違うのは、雨季の洪水の衝撃を防ぐために、アーチ型の橋の橋台の両側に水を通すような金剛壁を作り、洪水が橋台に衝撃を与えるのを和らげている。この橋全体が人に与える印象は素朴で壮大、実用的かつ美しい、というものである。この橋の名声は、その壮大な建築形式によるだけではなく、さらに重要なことは長期にわたって、この橋はすでに古城の男性たちが鷹を飛ばす経験交流の場所となっていたことである。鷹を飛ばす遊びは、古城の住民、特に古城の男性たちの大切な娯楽の一つであった。納西トンパ經典の中に、納西先民の狩猟活動の様子についての生き生きとした描写が多く書かれており、今日の、古城の大石橋で鷹を飛ばす遊びは、まさに納西先民1100年来の昔から狩猟風習が受け継がれたものである。橋はもともと動かないものであるが、しかし、ひとたび文化的な意味を与えれば、橋は命を持ち、生き生きとしたものになるのである。

仮に水が古城における流れ動く音楽だというならば、建築は古城に固まっている音符と楽章と呼ぶべきである。古城の民家の建築形式から、私たちは納西族の伝統文化、哲学思想、心理的素質、及びその独自の美意識を見出すことができる。

古城の民家は土木構造の庭付き建築で、その様式は主に「三坊一照壁」、「四合五天井」、「一進兩院」あるいは「一進数院」といったスタイルがある。その民家は山の近くにあり、高い家屋もあれば低い家屋もあり、河の傍らに建てられている。役所の建物にせよ、民家にせよ、全部青色一色の瓦を葺いた屋根で、渾然一体となっている。民間住宅の建築は親しみを感じさせる自然な感じを主としていて、漢、チベット、白族の建築様式が納西の木造建築の中に融和しながら発展している。派手な外見を捨て、実用性を重視しており、独

特の平民建築の特徴を持っている。そして、納西族の人は庭の飾りを大変重視している。庭に季節の花木を植えていて、手の込んだ盆栽が置かれ、草花の中からは鳥の鳴き声が聞こえる。庭の中は春のようで、鳥がさえずり花の香が満ちて、つまり、人間と自然が一体になって、ほのぼのとした温かい雰囲気漂っている。庭の飾りの中で、回廊は特に重要である。納西に「希于曼占于」(納西語)という民間のことわざがある。それは、人生は回廊にあるという意味で、その回廊の門、窓、仕切り壁、柱、アーチ、壁などすべてに、龍、鳳凰、魚、虫、花草、山水といった吉祥文様、神話あるいは人物物語などを彫刻しているのである。

麗江を訪れる人々は、麗江古城の悠久の歴史、「小さな橋・流れる水・人々」これらの基本的な構造、そして、人間と自然とが調和した穏やかな環境、申し分なく保存された古代民間住居建築、及び独特な民族文化を目にしたとき、誰もがこの地域の居住環境様式に惹かれ、感動する。そして、多くの人々が「人類は元来このように生活できたのだ」と心から感嘆するのである。

麗江古城の価値

周星教授から、簡潔な言葉で麗江古城の文化価値を説明するように頼まれたが、二言三言で一つの歴史文化のある名城の価値を語るのは容易ではない。ここで私は麗江の歴史とその特徴の視点から、麗江古城の価値に対して一つの簡単な分析と総括を示したい。

1. 活きている歴史文化名城

麗江古城は生きている古城である。その価値は古い砦や王宮、或いは歴史博物館のような「生きていない城」と並べて語ることはできない。

何万もの納西の人々は、今日なお麗江古城で生き生きと生活していて、彼らの衣食住と往来、喜怒哀楽を繰り広げており、伝統はここでは自在に「生きている」のであり、思いのままに「そぞろ歩きをしている」のである。

古城内の男女はそれぞれの分担がはっきりしていて、相手の長所を取り入れ自分の短所を補って、互いに頼り合って生活している。納西族の女性は大変勤勉で、重い仕事も軽い仕事もすべて自分が担っている(写真3)。豚(家畜)を殺すような仕事でさえも女性が担っている。城内に「豚を殺す路地」と呼ぶところがある。この路地の婦女のほとんどは豚を殺す仕事をしている。古城のもっとも有名な「知肩知乎」の交易現象はまさに女性が街へ出て物を売っている現象である。古城の納西女性はこのようにして男性に時間を与え、彼らに書画、琴、将棋を習わせている。これによって、古城の文書を書く気風は非常に濃いものとなっており、「書画の郷」とも呼ばれているのである。

古城の民間風俗は大変素朴なものである。どの家も婚礼や葬儀、あるいは家を造る、また或いは突然の不幸に見舞われたとき、みんなは自ら手助けに来てくれ、報酬など求めない。このような良好な伝統は、民族の凝集力、団結力を一層強くしており、住民は様々な災害に直面しても力強く生きることができる。1996年2月3日に



(写真3) 納西族の女性たち

発生したマグニチュード7の大地震で、古城のほとんどが廃墟に近い状態になったが、しかし、数ヶ月後、麗江古城は奇跡的に、再び人々の前に姿を現した。

麗江古城は真実の歴史を反映し、約千年近くもの間の苦難を経ても、その姿は依然として変わらない。中国の多くの地方では、観光の発展のために競って民俗村を建てたり、古代の町を真似て造ったりしているが、麗江古城の旅行熱は旅行の中にある文化の「含有量」を体現しているのである。

麗江古城は、町全体の構造から民家の形式、及び建築用の材料、工芸装飾品、施工工芸、環境などの面まで、全体が完全に古代の風格のままに保存されている。街路と水系は昔のままに維持されていて、カラフルな色の敷石でできた道路、石造りのアーチ橋、木の板橋、四方街商業貿易広場など、ずっと保存している。民家も元通り伝統技術工程と材料を使って修築や建造をしており、古城の風格はすでに地方政府から最大限の保護を得て、すべての営造活動（家屋、倉庫などを造ること）は等しく、厳格な抑制と指導を受けている。

この古城（町）が作られて以来、地方政府と古城の住民は自覚的に保護活動をしてきた。しかも、この活動は一日もやめることがなかった。約800年あまりの様々な出来事を経験していて、さらに百年の間にも滅多に遭遇しないような大地震の災難に遭ったにもかかわらず、麗江古城は依然としてその歴史の元の姿の真実性を保持している。そして、これに対してある専門家たちは賛嘆してやまなかった。麗江古城は、都市計画と個々の建築が歴史の風格を保っているだけでなく、さらに相当な芸術水準と都市計画水準を体現しているのである。

2. 自然と一体化した少数民族の建築芸術

麗江古城は、悠久な歴史を持ち、古風かつ素朴で、大変高い価値を持った歴史文化名城

である。古城は地方の歴史文化と民族の民俗風情を一つに体現している。

麗江古城は、少数民族の都市として、都市全体の構造から局部の建築までが、漢族、白族、チベット族などの民族の精髓を溶け込ませており、併せて、納西の独自の風采を持っている。建築物の「山に依り水に面する」、「雑然としながら緻密な（錯落有致）」、「水郷



(写真4) 麗江古城の風景

と「山城」の容貌を兼ね備えるといった設計芸術は、中国に現存する古城の中でも大変稀なことであり、納西族の人々が広く他の地域の文化を取り入れ、高度な建築芸術を作り上げたことを反映している。これは、納西先民たちが、民族の伝統と環境に基づいて、再び創り上げた結果である（写真4）。

流動する街の空間、生命力に満ちた水系、風格を統一した建築群、最適で住みやすい民家建築、人になじみやすい空間環境、及び、独自の風格を持つ民族芸術などは、他の中国の歴史文化名城と異なっている。

麗江古城は、充分に中国古代の都市建設の業績を体現している。家屋における耐震、日差し除け、雨よけ、通風、装飾などの面において、大胆に新たな挑戦を行っている。つまり、「貧しい中で智慧を出す」、「拙い中に巧妙さを隠す」、また、「自然さ質朴さ」といったことが、独自の風格を作り上げた。古城は、中国民家の中でもっとも鮮明な特色と風格を持つモデルの一つであり、中国建築史と文化史を研究する上で、得がたい重要な遺産である。中国建築史において、また世界の建築史上においても、大変珍しいものの一つである。

3. 納西民族の中心都市と納西文化の伝承の場

情報伝達・交通技術がこれまでになく発展し、世界経済が一体化している世界の大環境のもとで、都市化の水準は、一つの国家あるいは民族の近代化レベルを計る重要な基準となっている。そして都市化も、現在発展している国家の各地域、各民族すべての趨勢である。同時に、様々な少数民族の伝統文化は、まさに工業社会の価値観、人生観などの影響を受けており、伝統文化の保護と、近代化の発展との間の矛盾をどのように解決するかが、彼らが直面している巨大な挑戦である。

現在、中国には99個の歴史文化名城がある。しかし、麗江古城とチベットのラサは中国で数少ない、少数民族が多数を占めている歴史文化名城である。納西族の人々によって

創建された麗江古城は、最も典型的な納西族の中心都市である。例えば、四方街が古城の中心でありシンボルであるように、長い間、麗江古城はずっと納西文化の伝承の場と源であった。これは納西族土司木氏一族の支配していた中心であり、さらに、納西文化の精華の地でもある。したがって、麗江古城は納西族の文化、政治、経済の中心都市ということができる。



(写真5) 四方街での踊り

納西族が今日のような輝かしい文化を持つことができたのは、まさに自分たちの民族文化を一致させることのできる中心都市があったからである(写真5)。

古城の存在は、当時の社会進歩の本質的な特徴を体現しており、民族発展史の研究のために貴重な資料を提供した。その故に、古城の存在は貴重な文化遺産である。

4. 自然と一体化した人類の住居環境様式

麗江古城は自然美と人工美、そして、芸術と経済活動の有機的な統一体であり、また、人間と自然との調和的な伝統文化精神の表れである。古城には城壁がなく、まわりの田畑や山川、自然に接している。全体の古城の構造は完全に制限や束縛を受けておらず、自由である。四角い枠も無ければ、仏教や道教の戒律もなく、創造物の最高の境地、つまり自然を体現しているのである。自然を崇拜し、自然に順応して、ごく平凡な中に優れた奇観を持っており、これこそが古城の風格の存するところなのである。この種の風格は、納西文化がすなわち自然との親密な付き合いだということであり、境のない調和精神の自然な流露なのである。

つまり、麗江古城は文化的価値と無限の可能性を併せ持った古城であり、この事は、麗江を訪れるすべての観光客、学者、専門家が、注意深く味わい、感じ、見出す必要があります。ここにいらっしゃる先生方と学生さんたち、機会があれば是非とも麗江に観光あるいはバカンスにおいでください。以上で私の講演を終わります。皆様、有難うございました。

邦訳／夏目晶子(愛知大学大学院中国研究科博士後期課程)
2003年10月6日(月)第26回国際学術交流プログラム講演会
於 愛知大学豊橋校舎5号館4館541会議室